

牛真

卷七 第六月六號



□ 静に自己を反省すれば自分と云ふものに身心の二面がある。乍然此の身心が直に私そのものでないことは少く其身心の何ものであるかを考察すれば明かである。□ 佛教では私共の身心を凡て因縁によつて生じたとするが當である。そこで因縁によつて生じたものは又因縁によつて滅するも當である。□ 何等の永劫なるものもなく、何等の不滅なるものもない。□ 従て、私共の身心は因縁によつて生じ、因縁によつて滅するが當である。そこには何等の永劫なるものもなく、何等の不滅なるものもない。□ それを佛教では無常と云ひ、又無我と云ふ。そこには一として常住なるものがない、又常一主率としての我と云ふものがないからである。□ 乍然それほど私共の身心の現象に關する表面的研究に外ならない。身心そのもの、因縁生なるの研究である、之に反して更に身心の本源たる私そのものはないであらうか。□ この意味に於て、宇宙と人生とを考察すれば宇宙と人生とが本來一体にして不二である。宇宙を離れて人生ではなく、人生を離れて宇宙はない。□ 宇宙を全体と見れば私共は其の一部である。從て、宇宙の現象と其の實体との關係は直に又私共の現象と實体との關係となる。然に宇宙の現象は皆これ因縁の所生であり、私共の身心は即ち其現象の一部である。□ 宇宙を全体と見れば私共の身心の實体も亦宇宙實体の一部として、天地と共に本來常住なものではないか。□ この常住の自覺、即ちそれが永生の自覺であり、それが即ち不滅の自覺である。此の意味に於て、眞實の自己を知るに自己の常住を知るものは永生の人となり、不滅の人となる。□ 而し此の永生の上の自己、不の滅上の自己と云ふものが因縁によつて永劫に其の身心の相を造つて行くものであることに氣付くとき、眞實の自己を知るのである。(急)



人間の生活となつた私の宗教

土屋觀道

一、

同じ人間の生活でも、年と共に其の生活の内容が變り、又時と共に其の考へが變るやうです。而て、最近の私にはこの意味に於て、昔の私とは可なりに大きな變化があります。乍然之はまた一面私が從來の佛教に對する信仰内容の變化であり、又私の家庭生活に於ける考への變化であります。今ではそれが人類の生活であり、又我が淨土教のまさに進むべき道であつたとさへ思へてゐます。

私が初め出家したのは二十五才の春でした。而も當時の私は已に一種の信仰に居りましたが、それまだ今日から考へれば入信の初步にも過ぎませんでした。乍然當時の私がいかに神人の生活を求め、一身を投じやうとしていたかは全く想像の外であります。從て私がそれら偉人の言行を喜び、自ら之に倣はんとして心をそれらに注いだのも、一年や二年のことではありませんでした。從て當時の私が自然と之等の膜惣にふけり、從來の俗想像の外であります。從て私がそれら偉人の言行を喜び、自ら之に倣はんとして心をそれらに注いだのも、一年や二年のことではありませんでした。從て當時の私が自然と之等の膜惣にふけり、從來の俗人生活から遠ざかつたのもそれが爲めであります。

然に私の考へは之等の偉人を研究するにつれまして、可なりの變化を來たしてきました。而て、偉人の生活は必ずしも出家するの能でもなく、寧ろ社會に出で、社會と共に眞に生まるにあると云ふこ

とが判つて來ました。之主として今より考へれば我大乘佛教の精神によるところであり、又釋尊自身の行動により、示さる、所でありましたが、又キリストの宗教宣傳の壯烈と法然上人の生活とがいたく私をして動かしましたのでありました。

二、

茲に於て、私の生活は自づと慈光宣傳の方へと傾きかけました。それは丁度私が宗教大學を出る頃からのことであります、凡そ人格と云ふものはたゞこれ人格ある行爲による。而て人格ある行爲とは何であらうか、それは人として生れかいある生活であらねばならぬ。而て生れかいある生活とは何であらうか、それはたゞ永遠の生命と無限の向上に立つことであらねばならぬ。

此の意味に於て、私は人生の眞意義を永生と向上の二に求めたのでありました。さうして、永生の道としては彌陀の本願に乘じて、天地の大道に入ることであり、向上の生活とは即ち價値の生活であつて此の念佛の力によつて、社會の改善に盡すことであると直觀したのであります。言換れば眞實の人生は自ら道を求むると共に之を一般の人類に宣布することにあると信するやうになつたからであります。

かく申せば、私共の信仰は非常に高い理想のやうに聞こえますが、之は私一人の信仰ではなくして、一切人類の本心の願であると共に、又佛の最も高潮して止まないところでもあつたのでありました。

乍然こゝに一つの私の疑問は何故に僧侶は妻帯をしていかぬかと云ふことと、今日の僧侶は果して佛教で云ふところの正式の比丘であらうかと云ふ点であります。さうして、前者に對しては凡そ人間の宗教として、何故に佛教は人類の妻帯を許さぬか、さうしてまた、人間の妻帯が果してさうまで悪いものであらうかとの疑問であり、後者に對しては、所謂多くの僧侶の生活をながめて、あまりに私の理想する人類の生活と相離れているものを見たからであります。而て其の結果は遂に私をして、僧侶必ずし

も妻帯を禁すべきでなく在家必ずしも僧侶より卑しくないと結論に到達したのであります。否、寧ろ今日の結果から申しますれば宗教には出家と在家の區別はない、僧俗の區別は單なる生活の形式に過ぎないと云ふことになりました。否それどころか、今日の私の宗教としては、一切人類の宗教として、僧侶も妻もち子も家庭を以てこそ、眞の人類の生活であるとさへ考へるやうになりました。之が私の佛教に對する大なる考への變化であります。是處文化が釋尊の生活は片寄り過ぎて伝給しと上人を一歩は一歩は至れりあり

さうしてまた、私はこのことを、佛教文化の發達の上に發見し、そしてまた、今後來るべき人類の宗教は正に吾々の考へるやうな宗教でなくてはならぬとさへ信するやうになりました。

然ば佛教文化の發達とは何でありますか、それは釋尊の佛教がいかなる形を以つて、今日の佛教にまで進んで來たか、言換れば釋尊の佛教が私共の意味するやうな僧俗を問はない、人類の宗教となつて來たかと史的發達の文化史的考察であります。

それは從來の宗教、特に釋尊の佛教に於て、其の當時形相は全く出家の形であります。之は釋尊の發意であつたか、それとも印度當時のハラモン宗教に其の型をとつたか明かでありません。乍然釋尊求道の形式として、在家を捨て、出家の身となられたことは確かであります。從て、多くの佛弟子と云ふものが、釋尊の道を慕ふあまり、其の形までも釋尊に等しうして、出家の形となつたのも亦事實であります。

乍然この際、佛弟子と云ふものは出家のものに限ざられて、在家の中にはなかつたものか、古來出家弟子のみを佛弟子として、在家の佛弟子は之を佛の信者として、扱つた傾きが多いのであります、それが果して正しいのかどうか、釋尊の說法も主として當時は出家の佛弟子にせられたものが多く、又眞

に解脱を求めるやうとしたものも、主として出家の弟子のみにあつたかのやうであります。

乍然佛教思想の發達と共に、多くの佛弟子は單なる聲聞の比丘であきたらず、進んで佛陀と等しき佛地の生活にまで生きやうとして來たのであります。之が所謂大乘の佛教でありまして、佛心を宗とする菩薩の大行であります。之は一時大乘非佛說とまでなりましたが、釋尊自身の生活にまで心を注ぐものは直に佛陀自身の動的生活の上に此の理想を發見せすには居られないものであります、此の運動が出家比丘の間に起らすして、在家の佛弟子に主として起つたと云ふことは非常に人類の文化宗教として、大切なことであると思ふのであります。即ち在家の菩薩と云ふものが之でありまして、今までの主として出家比丘として行はれていた佛教が、在家佛教として復興して來たと云つてもよいのであります。而も、それがいつしか出家比丘の生活を聲聞比丘の生活として之を卑下し、自らを大乘の佛教として稱揚したと云ふことは一面在家佛教が出家佛教の上に位したことを意味するものであります。之一に佛心の躍動であり、佛教の道德化であります、又佛教の普邊化と申してもよいのであります、乍然出家は専門に之に從事し、在家は他に仕事があるため、いつしか此の理想は又出家にも菩薩ありとして、之にその理想をとられるやうになりました。之が即ち出家の菩薩であります。言換れば折角人類の宗教として在家の中に芽ばにて來た佛教が再び出家の佛教に還元せられたかたちとなつたのであります。

れなかつた所以であります。乍然この菩薩大乗の思想は比丘生活の内容の上に非常な展開を來たしました。即ち佛心大慈悲の社會的活動であります。而て其の後の佛教は殆んど悉く此の思想に動かされぬものはないのであります。此の思想が一面には諸佛成道の本願となり、一面には他力救濟の淨土教となつて來たのであります。

即ち大乘佛教の思想發達は諸佛の成道が主として衆生救濟の本願によつて起されて來たことを明にしましたが、それと同時に、此の思想を認むる佛教はやがて此の佛菩薩の救いの御手に許さる、ことを認めて來たのであります。而て、其の教の最も發達したのが所謂淨土教であります。即ち阿彌陀佛は其の佛心窮極の大慈悲であり、其の對手は一切の衆生を抱含してありますところがないのであります。即ちいかなる時と所とを問はず、自ら如來の本願をして彼の國に至らんと欲するものは其の人の罪とがを問はず、等しく念佛するものは皆悉く救か衍ると云ふ教へであります。

此の教へは印度ではあまり行はれず、支那に於て善導大師によつて強く主張せられ、我國に於ては法然上人によつて初めて一宗として建てられたものであります。こゝに初めて從來の佛教が普遍の宗教として、在家の生活に現はれて來たかの感があります。即ち此の佛教にして、在家と出家との區別を絶し、又如來の佛心を認むると共に衆生の佛性を認め、さうしてまた、現實に即していかなる罪深き人も愚かなる人も漏らさず、等しく念佛の一行で佛地に進む事ができると云ふことは今や大乘佛教の極地に到つたものと云つてもよいのであります。而て之を最も明に言顯はしたものは法然上人であり、之を家庭生活にまで現はしたもののは親鸞上人であります。

五、

乍然それにして、從來の淨土教は未だ充分といへぬ点が多々あります、それはまだ出家の生活を以

て在家の生活に勝るとなし、夫婦の生活や家庭の生活を以て、獨身の生活に劣るかの感にあるものが多いからであります。乍然何故に出家の生活が在家の生活に勝るのであります。さうしてまた、何故に夫婦の生活が獨身の生活に勝り、親子の關係が凡情にすぎぬものであります。凡そ佛教の眞體は佛心を以て宗とするのであります。從て眞の佛教は其の心にあつて形ではないのであります。從てたゞい、其の姿が比丘比丘尼の姿であります。心が佛心を離るれば外道であり、其の心が佛心を離れなければたゞい其の形が外道の姿であります。それが即ち佛教であります。從て眞の佛教は決して其の生活の形式にはよらないのでありました。

此の意味から時代を達觀して建てたのが即ち私共の宗教であります。そこに夫婦の生活を許し、子供の出生をとがめぬのであります。所謂すべての人類の生き活く道としての宗教であります。從て人類の生存を許す限り、夫婦の生活は許さるべきものであり、夫婦の生活が許される限りそれによつて生ずる子供の出生は決して否定せらるべきものではありません。若し子供の出生が否定せらるべきものでない限り、どうして其の子を愛育することが罪惡であります。それはたゞ、男女の性慾に左右せられて夫婦の情愛を欠き、親子の愛におはれて、社會の平和を無視するときのみ、之等は禁止せらるべきものであります。從て在家の菩薩も現はれて來るのであります。殊に淨土教として一切人類の生活に現はれて來たことは正しく眞實の宗教が今までの僧侶と云ふ特種的な宗教生活を捨て、全人類の社會生活の中に普遍の宗教として現はれて來たことを示すのであります。

凡そ人類の生活に於て、否少くとも今日人類社會に於て、誰か自分の夫婦の生活を罪惡の結婚と信じ

て行ふものがありませう。そしてまた、誰か其の結果として生れて來た子供に對して、これ罪惡の結果なりとして悲しむものがありませう。今尙さう云ふ人が此の存在するならば、それらは未だ眞に人生の意味も知らず、未だ夫婦相愛の結婚の意義を知らないものでありまして、又子供に對する親としての眞情を無視した人の考へに過ぎぬのであります。此の意味に於て、眞に佛子の自覺に入つた私共の生活は同じく如來の子として許されたる最も祝ふべく又喜ぶべき夫婦の生活であり、それによつて出來たる自分の子供は又等しく如來より與へられたる佛子として限りなき喜びと望みと力の中に之をはぐみ育て、行くのが當然となるのであります。從て結婚は神聖せられ、子供の出生は祝福せられて來るのであります。そこに一夫一婦の戀愛は成立し、親子のむつみは許されて、一家もそのまゝ、慈光の生活に輝くのであります。所謂一家和合し、社會和合するの眞生の世界が初めて此の意味に於て出現して來るのであります。

六、

此の意味に於て、私共の宗教は從來の舊き形式を破つて、所謂身心自由なる佛陀の本心に歸つたのであります。而て、そこには所謂人類生活の根本基調たる家庭の生活を許し、從つて夫婦も親子も共俱に如來を中心として其のまゝの形の上に自由に生き活きて行くことのできる生活となつたのであります。言換れば私共の宗教は必ずしも、家庭を去つて出家せずとも、從來の在家のまゝで、夫婦相和し、一家相信し、親子相むつんで行くところに、如來の佛地を楽しむことができるの生活となつたのであります。更に言換れば今までの佛教のやうに、在家を卑しみ、出家を尊ぶやうな生活でなくして、社會を肯定し家庭を肯定して、夫婦も親子も共俱に一緒となつて、如來の道にいそしむの生活であります。否それどころか、夫婦の生活を以て喜びとなし、親子の生活を以て樂しみとなし、而も其の事が單なる個人の私

事にあらずして、直に社會生活の一員としての公事として之を尊ぶものとなつたのであります。而も此のことは單なる私一人の考へにあらずして、万人の心底に流れて止まぬ宇宙大生命の要求として、私共の心に現はれて來たのだと信するものであります。而て恐くはこれ人類生活の續かん限り、永劫に流れ止まぬ私共の願ひであります。

私が妻もち子もち家もつやうになりましたのも之が爲めであります。而て、近頃僧服を脱いで俗服に歸つたのも之が爲めであります。言換れば今や私の生活は初めて人類と共になる生活に歸つた人間の宗教となりました。(三、四、二、越後見附今井氏方にて一三、五、一五、再三、四校東京にて)

旅　　日　　記(四月、五月)

土　　屋　　觀　　道

旅日記——越後　三条　四月四日

此の地は今から八九年前當地には可なりの同志があつて、一時は全町舉つての盛會でしたが、其後事情あつて一時全く音信さへ録になかつたところ

であります、然に見附の今井氏の努力によつて

舊交を温むべく盡力せられ、又舊友の二三が之に策應して、此の度の會が催されることになつたの

です。集るもの百二三十、會場としての淨樂寺は

一ぱいであります、中にも當住職を中心として小池、澤、大谷の方々が非常な喜びと其の努力とは全く私をして衷心から感謝せしめすにはおきま

せんでした。

歸りは少々急ぐので夜の急行で立らましたところ、柏崎では三十名の道友の方々が此の遅いのにわざわざ見送りをして驛まで來頃いたことは全く御禮の申しやうもありませんでしたが、それでも、かうして道の爲めに精進して頂けるかと思ふとき、そぞろに合掌せすにはおれぬものがありました。凡そ人の心の中

に於て、お互が信じ合い許し合つたほど此の世に於て嬉しいものがまたござりませうか、私はいつも思ふのです、かうした人々の爲めに心から盡させて頂くほど人生の喜びはなく、又之ほど人生として仕合なことはないさ。五日の朝、上野に着くと、原様の奥様と家内さが良子を連れて出迎へてくれました。歸つてから、急ぎ二階に昇つて、光道さんと會つたとき、彼が見かへるほどに生長していたのには驚きました。

十一日から行基幸の集りには十日の朝の急行で東京を立ちました、夕方行基寺に登りましたが、偶然にも道づれが五六人もできました。行基寺の集りは近年に至つて一層の道友の集りが多くなつて行くやうです、そして今回は總員九十名の上を越し、念佛も從來に比して一層精進せられたことは限りない喜びでした。殊に最後の晩の茶話會の感想談には少からず教へられ、しつくりした家族的道友の集の中に之から協力して共俱に精進努力しやうとの考へが全体に行き届いていたことは更に一層の喜びでした。

十八日の晝間は丁度各地遠近の國々の人の集りを好期として何か親睦會を開かうと云ふので、汽車辨で一同養老の瀧にまいりました。丁度天氣は良し、氣候も上々、全く申分のない好期會でありまして、特に多忙の中を岐阜大垣の方々が例年になく集つて

頂いたので、全く時過るのを忘れるほどでした。夜は四日市の中野真生製陶所での集りでした、行基寺様始め七人の人々が養老から引つゞいて隨喜せられ、先方でも一しほの喜びでした。十九、二十日とは名古屋の集りでした。そこで十九日には早々四日市から彼地へまゐるべきであります。朝の間五六の道友と佐屋の黒宮氏を御訪ねいたしました。越後の人々や静岡、岐阜の方々で初めての人もあつたからであります。

名古屋での集りは晝の午後から念佛と講話でした、夜は縣の社會課から来て主として、教育映畫の活動寫真がありました。人よせと共に普通教育としての新しい試みとしては可なりに効果があるらしかつた。集る人も一ぱいでした。道友の盡力又大なりと云ふべきです。

二十日の日は行基寺様と越後の原様と小泉様と名古屋の鶴津さんと五人で朝のうち、覺王山に自動車を馳らせました。午後は道友の集りで念佛と法話です。夜は座談會及び最後に、今后の名古屋に於てどうして新しい道友を作るかについての相談會がありました。それには自分だけの趣向や念佛ではおきたらぬ、自分の信仰を進めるとは云ふまでもないことです。吾々は又吾々程度にそれ相當の社會的慈光宣傳の第一歩に立つといふこともなければならぬ、ついては今后願くばたといふこともないから

せいせい積極的に奮戰努力しやうと云ふことでした。道友の仲もかうなれば占めたものだと存じます。

大阪同盟 大阪では二十一日を晝を西成區役所の方々に講演、夜は北市民館で眞生俱樂部の講演會でした。

後者は今度眞生道友と市民館長志賀氏との間に意氣投合して、以後智識階級方面の集りを催すといふ考へで出來たものです。主として各種の方面から眞生の道に立たうと云ふ集りです。同志の近頃はない元氣と精進の心に私は嬉しさの涙さへ催しました。二十二日は生玉寺町の長圓寺で園遊會を開催しました、不幸にして雨天でしたがそれでも道友の集りは百名に近かつたのです。各自一家を舉つて集まり、朝の講演や晝後の福引きや、夜の座談會など一として心からなる睦みでないものはありませんでした。それに今回は特に清水の中村辨康師や津島の中野善英師、其の他大垣の桑原省三氏、岐阜の古賀氏、北越の原の奥様、其の他神戸、尼ヶ崎方面の道友が朝から集つての喜びは限りない喜びでした。信仰の温まると云ふことは専修念佛の大切であることはもとよりであります

静岡の集り

二十三日は早朝急行で大阪を立ちました。中村師と中野師と私の三人でした、中野師には一の宮で別れ二人は静岡の關様に着、夜の講演會に出ました。此の會は關氏の父君の御他界に因んで、之を紀念して眞生運動に資したいとの願でした。栗生、藤井の御兩氏を初め當地の道友は全力を注いでのビラ張りや新聞での廣告で、集るもの二百に及び、當市としては近頃にない盛會であつたとのことです。中村師は信仰の世界と題し、私は人生の眞意義と題しました。會館も丁度手頃もので話もしよく心から歡喜に満されました。此の地は已に十年前から私にとつては結縁の地です。そして終始を一貫した栗生氏の御盡力は遂に今日の集りとなつてまゐりました。静に再び春が來たやうで

一

す。回春の曙光が輝いて來たやうです。

◆焼津

二十四日は晝過ぎまで静岡でした、夕方になつて、焼津に行きました。五六の道友は三度も驛まで出迎ねて頂いたそうです、其の熱心さと心やすだてに限りない感謝の心でありました。夜の集りは五十名許り、集る數は多い方ではありませんが此の地も段々道友の熱心さを見る事ができるやうになりました、割合に今まで宗教心にとほしかつた此地としては反つてゆつたりとした、眞の宗教が芽ばえて來たやうです。五六の道友の方々には抜くことのできない力さへ見ねて來ましたことは又とない喜びです。因に當光心寺上人の御母堂が突然病没なさいましたことは限りない悲しみの一つでした。先回までは非常な丈夫さを誇つて喜んでおましたのに、今日の有様は全く人生のあてにならない無常の一面を垂示せられた感じがしました。

▼歸京、二十四日焼津を終つてから、其夜行で歸途につきました、寮に着いたのは二十五日の朝五時半でした。歸るミ長女が風邪さかで床に居りました、二十六日にはハシカさ列り熱も高いの

で心配でした、良子と光道とに感染させまいとつさめていましたがはめられませんでした。健康な子供の顔を見て喜ぶ親の心はそれしかならぬ子が四十度何分の發熱に若しもさまは親として可なりにひどい悩みです。あわれにも又同情に堪えぬものがありました。八幡にまゐりました。主として在郷軍人並に青年團の春季總會に對する講演であります。題は國民の自覺と題しましたが、第一國民思想の統一と反省を促しました。當地には丁度一年ぶりの事とて、道友の人にも心から迎ねてくれられました、たといはそばをでもかうした心からの歓迎こそ私の衷心から歓びとするところであります。

以上はたゞ四月中を通じて見た道友の集りにすぎません。乍然此の間日にまし道友の間に於て、自ら道を求むるの士の可なりに多くなり行くのと又それと同時に此の喜びを多くの人々に傳へたいとの運動が各地に起りかけて來たことの著しいの

とは可なりに大きな變化であります。此の意味に於て、私共の前途には限りなき大きな望みと力と喜びとが輝いて居ります。(三、四、三〇)於東京

▼追記、五月十五日。)其后五月の一日となりまして、美智子の發熱四十度八分となり、三日に至つて良子遂に又ハシカで床につきました。之より先き各地の傳道を己に斷つて置きましたが黒宮

のため、御斷りも出來ず大困りでした。光道に感染させまいと二階に母親を隔離している爲め下では二人の子供が私居なくては全く仕様がなくなりました。生れてからこんなに困つたことはあまりにありません。其の後一日黒宮様へ御斷り方々隨喜し、殆ど日歸

りに歸りまして、其后も引つゞき看につきました。近頃はおかげで二人とも床を離れ、光道にはまた感染の模様がないようですが今後どうなりますことか、またその用心をしておます。従つてそのため、出すべき眞生も手につかず、只今漸くそれができあがつた始末です。

それにつきまして、また各地の道友の方々に色々の御心配をかけました事を衷心から御禮申上ます。願くば私の不徳を許して今后の活動に御助力のほどを願上ます。

◆因に各地の道友の中に近頃たくさん御子様が御生れです。所謂第二世の同盟の方々かと思へば一層の喜びです。

越後方面では佐藤益章様に正様(男) 岩田征様

述懐

常 生

に正道様(男) 岩下祥兒様に寵様(女) 今井善吉様には近々 浦賀の長島様に御嬢様。津島の中野善英様に同く御嬢様。清水の中村辨康様に御嬢様名古屋の磯田様方に御嬢様。大垣の淺野様に御孫様(男)が御生れでした。お互に御喜び申しませ

う。

◎南無阿彌陀佛と口に唱へて居りながら、意も身も念佛になつて居ない。嗚呼何たる腑甲斐なきことよ。

◎廣告や法螺ばかりで商品の實質が悪るければ駄目だ、俺の店は品質本位で決して廣告や法螺は吹かない、と大々的に法螺ばかり。

◎慢心する様な事では信仰の退歩である、乃公の如きは信仰に這入つて幾年目であるが決して自慢などはせない。と自慢話に花が咲く。

平
凡

吉水辨道

吾朋便り

吉水辨道
それは極めて平凡な生活である、信仰などといふことを、かつて口にしたこともなく、亦自身も一向左様なことを知らぬげに振舞つて、而も立派に信仰の道をあゆんでゐる人がある。金と隙のある人達の「信仰道樂」イヤ「求道遊び」とひきくらべて見てほんとうに尊い心地がする、このやうな人こそ心がら合掌したい。

震災で倒潰したあれ寺へ、ある和尚が新に任命されて住職した和尙けなげにも復興のために身を碎いて努力をつづけた、先づ朝は早く起きた、霜凍る嚴寒の朝も、本堂跡のバラックからは、きまつて四時には御観經の鉦の音が流れた、無道心の和尚のみ多い今日此の頃に、此の住職の行ひ振りには第一に近處の人達が頭を下がた、忽ち檀家のの人達の心を捕へた、信用は日にまし加つて來た。

誠に寺も法も人に依つて尊い、さればいくばくもなく、和尙の
努力によつて立派な本堂が再建された。

わづか一年とたつた今日だが、和尙の行ひ振りががらりと變つて終つたことは非もない、うたひや、朝ねもする、酒も飲み始める暴言も吐く…………、噫、この新しい本堂よりも、あの美しい莊嚴よりも、否々、そんな死んだ物ではない、すべてさういふものを産出す生きた力、いきた生命が住職の身から抜け落ちやうとしてある。

親切な友人が忠告すると、和尙も流石にざんげはする、そして泌々した口調で答へる。曰く、實は本堂が出来終つてからは、いはば私の土台が出来て終つてからは、幾ら力んで見ても、一年前のやうな緊張がもとつて來ない、實際もう朝なごも早く起きらないのだから仕方がない、イヤ第一モ早そんな必要をみどめないのだ、世間だつていつまで。

あ、悟後の修養のより尊いといはる、喜は此處だと感じた。利養か、名聞か、少くとも優越感か、いつまでいつても、どこまでいつても、苦のやうに喰付いて來て人間から離れやうとしないこの心、併しながらその心あればこそ人間が生きるこの心、つくづく古聖の名利をすてゝ、跡を晦ました芳觸を思ふ。

あれは、初めから名の無いことこそよけれ、利の無いことこそよけれ、従つて隙の無いことこそよけれ、平凡にして道にかなつた人こそほんとうに世にも恵まれた人でなければならぬ。

吾居此日は參上尊廟の嚴しきを拜し得ました上に繁烈なる御垂教を聽聞出來ました事は言辭にも盡し難い喜びで御座いました。私は行基寺は始めてありましたが、如斯風光明媚の聖地が近郊にある事もしりません。此聖地で十五年も遭はない野田君に會ひましたのも御佛のお力だと信じて疑はないのであります。

私共無智不信の輩にも御垂教聽聞の度毎に偉大なる力を感する様になりました。やがては皆様と同じく如來の赫々たる光明に接し得るものと存じまして一増精進致度思ひます先は失禮をも不顧端書を以て御禮申上ます。

▼尼ヶ崎市 橋本政一様より

月光山 桂木政一様より
吾々は何時迄も上人許りに頼つて居る時代

▼尼ヶ崎市 橋本政一様より

ではないので上人の心を心として立つ時にそ
こに御佛の力が湧くのを覺へます。ほんとう
に吾々同人はもつと早く一人も残らず上人の
御自覺に迄進ましてもらはなくてはなりませ
ん、眞理に打ち立つ處にはそこに恐れる何物
もないのです、今回上人の御越し下されない
のは反つて吾々に對する無限の恩寵であるこ
のを感じ寧ろあらん限りの力をためして見たいと
思つて居ります。

先日はお説を持ちまして誠に賛かな同盟の園遊會に參加させて頂きまして心からお禮を申上げます、當地も北市民館を中心といたしまして真生主義が大に世間の注意を引く事となりひそかに悦んで居る次第であります、大阪にての情勢が實に全國的に波及して參る事さ信じますので同盟の若手連中は頗る熱心に奔走されつゝあります事は御同慶に堪へない次第であります。

▼高松市 堀江義廣様より

▼高松市 堀江義廣様より

▼巢鴨町 木下忠男様より
何ごなく大愛の中に抱かれた心地が致し誠
に喜ばしく御座いました、説かれる所一言一
句が我もの、様に思はれ、お互が眞に生きる
ご承はる時大なるミオヤの尊さをつくじ
じさせられます。

於て三日間の豫定で修養法話會を開きたい意

◎行基寺三昧會同人の集り

向を持つてゐます。私さしては青年會の外に丸龜阪出方面に一、二日講演して戴きたいと思ひますから話しが双方の纏れば或は五日位になるともしれません。此機會に於て當地に眞生同盟の地盤を設立せられん事を秘かに熱望してゐる次第です。

▼大垣市 桑原省三様より
南無阿彌陀佛

同上

和田一作石宮地時和舎は一橋頃眞隣の講演會開催に付佐羅は引歸りは止た、今回佐羅

行基寺
春季別時念佛三昧會參加芳名

性別		性別		性別	
計數	別	計數	別	計數	別
五	男	三	男	一	男
七	女	七	女	一	女
二	男	四	女	一	女
一	女	六	男	一	男
三	男	九	女	一	女
一	女	七	男	一	男
一	男	五	女	一	女
一	女	九	男	一	男
一	男	四	女	一	女
一	女	七	男	一	女
一	男	四	女	一	男
一	女	八	男	一	女
三	男	二	女	一	女
三	女	一	男	一	女

